

第3回 徳島市文化振興ビジョン策定のための市民会議 会議録

日 時 平成29年1月23日（月） 午後2時～午後4時半

場 所 徳島市役所8階 庁議室

出席者 16名（委員9名、事務局ほか）

1 開会

2 あいさつ

副市長挨拶

3 議題（1）徳島市文化振興ビジョン（素案）の検討について

事務局から、資料1、資料2により前回までの経緯について説明

引き続き、事務局から資料3、資料4について説明

会 長： 資料3の文化振興ビジョン（素案）検討資料について、ご意見はあるか。

A 委員： 今後、大切なのは人材育成と考える。文化振興ビジョンの取り組みの基本的な視点にも人材育成が挙げられているので、ぜひこの点を充実させていただきたい。過去の委員会でも専門的人材の配置や育成、文化芸術関連の情報公開が定常的に行われていないなどの課題が挙げられていた。

ひとつ気がかりなのは、文化財の保存と活用の部分である。いま徳島市内では考古資料館と徳島城博物館を中心に資料収集や展示を行っているが、明治以降の近代の文化について、収集・展示・公開の場がない。阿波おどりにについては古い連が70年を迎え、代替わりの時期になっており、それぞれの連が持っている古い資料が継承されていくのかという心配もある。

藍についても隆盛を招いたのは明治始めまでで、一度衰退し、いま再興されている。他にもモラエスなどの人物についてのこともある。こういった近代についての文化の収集、継承が欠けているように感じる。

会 長： 旧三河家住宅の保存に関して議論が行われていた中で、市としてのまちについての記憶や市民生活を展示するという機能を検討してはどうかという意見もあった。県立博物館の中では徳島大空襲なども全体の歴史展示のなかにあるが、まちの近代の歴史というなかではどのように収集、整理、展示をするというのは課題として挙げられるかもしれない。

アンケートの問11では、約75%がインターネットで情報を得ると回答している。文化の面においてもインターネットの活用は最重要なテーマとなることが裏付けされている。

文化振興ビジョンで着目したのは、「社会的包摂」という文化の役割についてである。これからの時代は、ますます社会的包摂における文化の役割は重要になってくる。その点についてビジョンの中に見え隠れはしているが、はっきりとは書かれていない。事務局で「社会的包摂」についてご意見等あればお願いしたい。

事務局： 11ページ 3の「文化による交流促進」という取り組み方針の中に、「文化交流を促進することで、人と人のつながりが深まり、信頼関係が築かれていく。」「共生社会の実現」という大きなキーワードが入っている。そういう形では考えているが、何かご指摘や案があればご教授いただきたい。

会長： 市民団体主体の文化活動の支援などについても一通り触れられているが、ニュートラルな書きぶりをされている。以前には、「徳島市らしさ」に重点をおいたほうがいいのではないかと、という意見もあった。このビジョンに徳島市らしさが乗せられているか、将来に向けた方向性が表れているか。そういう点についてもご意見をいただきたい。

特に、年末にLEDアートフェスティバルは、はじめての冬季開催だったが、素晴らしい催しになった。観光的な取り組みもあると思うが、斬新性もかなりある。そういった点からもご意見をいただきたい。

B 委員： 新しいアートとして、LEDなどを使ったデジタルアートはこれからもっと伸びていくだろう。先進的な作品を徳島で大きな規模でみられたのは良かった。

LEDアートフェスティバルは3年毎に開催し、去年の12月で3回目だったが、特に若い人や子どもたちがたくさん訪れ、笑顔で見ていたのが印象に残っている。新しいデジタルアートを徳島から全国、世界に発信する取り組みは続けていきたい。

それとは別に、13ページの徳島らしい文化の継承のところ、阿波おどりや人形浄瑠璃や藍染めなど、伝統的な徳島らしい文化をいかに継承するかというのも、徳島の文化としては非常に重要だと思う。

特に、人形浄瑠璃や藍染め、大谷焼などは、意識的に学校教育で教えたり体験させたりしないと、どんどん若い人の関心は薄れていく。学校教育で徳島らしい伝統文化の継承をしていくということ、事業例に入れていただきたい。

また、事業例で「とくしま市民遺産の情報発信と活用」とあるが、とくしま市民遺産というのは平成21年に定めて以降、改定をしていない。それ以降も新たに増えている部分があると思うので、定期的に見直しをしていただきたい。

会長： 学校教育と伝統文化という部分についても触れていただければと思う。

とくしま市民遺産についてご意見はあるか。

A 委員： もっと市民の皆さんにわかっていたいただきたい部分と、時代によって変わる新しいものを入れていけばいいという部分がある。また、とくしま市民遺産第二弾をやろうという市民の動きがあれば継続しよう、という話もあったが、そう

いった話はなく終わってしまったというところもある。

会 長： 3ページに新しい文化芸術立国について書かれており、文化プログラムの全国展開などに触れている。最近の話題としては、伝統文化としての阿波藍に関連するが、いわゆる藍色が東京オリンピック・パラリンピックのエンブレムに採用された。文化振興ビジョンとしても、2020年に向けた動きがあってもいいのではないかと思う。

ここに「伝統文化の継承」があるが、やはり「発信」がほしい。発信の中でオリンピック・パラリンピックに向けたプログラムで、県と協調することも考えられるのではないか。

徳島には、阿波おどりや阿波藍など、ストーリーには事欠かない文化資源がある。そういったことも活用できないかという思いがある。

C 委員： 会長の意見に賛成する。せっかくであれば徳島らしさはもっと力を入れて書いていいのではという思いはある。

会 長： やはり、ニュートラルな表現になっている部分はあると思う。できれば特色、ビジョンの中で新しい徳島市の文化の方向、新しい切り口が少しでも見えればいいと思う。可能性を検討するというだけでもいいと思うが、積極的に取り組んでいただきたい。

特に文化は個性を出せるアイテムだと思うので、千載一遇のチャンスとも考えられる。表現が難しいとは思いますが、検討していただければと思う。

D 委員： 「人が輝く」というところなので、アーティストを育てるという視点があってもいいかと思う。

もう一つは、文化も時代によって変わり、いまや市民の生活も観光になる時代である。こういったビジョンには普遍的なことしか入れにくいという部分もあるため、このような表現にならざるを得ない、というのが正直な感想である。

一点、8ページの「文化芸術のもつ創造性は、自分の幸せを考えることにつながり」というのはどういう意味か。生きがいやひいては創造性につながるものなのか、と自分なりに解釈したのだが、わかりづらいので考え方を示していただければと思う。

事務局： この表現の意図は、自分の周りからだんだん広がっていくことで、地域文化振興につながるという意味合いで書いたが、ご指摘いただき、わかりづらい部分があるかと思うので、表現を再考する。

会 長： やはり文化は余裕をもった個人の趣味的な活動という見方が依然として強い。そういう考え方が間違っているというのではなく、文化芸術が必要なものであり、すべての人の幸福度につながっていくという理解を進めることは非常に重要である。それがない限り、いくら行政が先導して文化団体の方が活動しても、市民すべてのものにならない。文化の効能は幅広く市民共有のものという理解を深めていくことも重要だと、アンケート結果からも感じる。

E 委員： アンケートやビジョン素案を読み、結局のところまずは素晴らしい文化に触れて興味を持たないと、はじまらないのだということを感じた。徳島で文化を高めていくためにも、良いものに触れないと、良いものを創ろうという気にならない。いま自分たちが持っている文化がどれだけすごいのかということを知ること考えねばならないと感じた。

良いものがたくさんあるにも関わらず発信できない状況はなぜかと考えると、基本をとばして応用の話ばかりしているようなところがあるのかと思う。もう少し徳島で文化に理解を持てる人を育てていくところから考えねば、難しいのではないかと感じる。

会 長： 「文化の底上げ」「文化レベル」という言い方はあまり好まないが、文化性が豊かな市民を増やすということは重要である。その点では、ご指摘のとおり「本物に触れる」ということは非常に重要である。より、優れた芸術文化に触れる機会を提供する環境があれば、文化に触れる市民性をつくっていける。

F 委員： ビジョンの策定後、市はビジョンの具体的な推進にどのように関わるのか。

公表したら終わりでは意味がないので、そのあとのことを考えてほしい。

まちが輝かないから人が輝かないのだと考える。人が輝ける施設がまちの中にあれば、そこで活動する人も輝く。

会 長： ビジョンの推進体制は非常に重要である。基本理念である「文化芸術の力で、ひと・まちが輝く とくしま」という覚悟を市政、市民全体で共有できることが肝心である。また、市民の総合力を結集して推進体制をつくっていくことが重要である。

徳島市全体の文化をこうしていこう、というのを検討できる、市民ぐるみの検討体制があるといいのかと思う。

F 委員： 文化の多くは、民間や個人、グループが活動している。公的な機関の役割は、その活動を援助する場所をつくるということ。これは行政にお願いするしかない。その中で目玉だと思うところに補助金をつけるなどという形にしないとうまくいかない。

G 委員： アンケートでは、ホールの建設について触れられている意見が多くある。実際に様々な催しが行われているが、満席・満員になるまでの催しは少ない。そういった状況を考えると、アリーナなどの大きすぎる会場を造ることが文化振興に繋がるのか、というのは疑問に思った。

H 委員： 人形浄瑠璃について申し上げると、出前授業などの希望がある学校には行っている。昨年は市内の小学校中学校の校長会にお願いして、いつでもお話するし人形も連れて行く、という話もさせていただいている。だが、呼んでいただいたり来ていただいたりは、市内の小学校では2校だった。

人形浄瑠璃の関係者も、どうやったら学校に行けるのかと悩んでいる方もいらっしゃる。例えば、阿波おどりは小学校も中学校も体育の授業である。人形浄

瑠璃や邦楽など徳島にあるいいものが、授業のどこかで取り入れてもらうというシステムができればいいと思っている。

人形浄瑠璃も他分野とのコラボレーションなどの新しい取り組みを行っているが、活動が皆さんに伝わっていない部分があり、情報発信の仕方も難しいと感じている。

会 長： 教育との連携における成功事例としてよく紹介されるのは、金沢の21世紀美術館である。21世紀美術館は、市内小学校の4年生を、必ず1回は美術館に無償で招待する。その際に、招待チケットを配布する。そうすると今度は親たちと一緒に来る。例えば阿波十郎兵衛屋敷に市内の小学何年生は行く、などとすると、双方にメリットのある結果になるかもしれない。

F 委員： 東京では、年に1度は歌舞伎座へ一幕物だけを観に行く。そういう体験が大きくなったときに、興味を持つきっかけになるということもある。

音楽はいろんな種類があるが、ホールでなければできない音楽もある。例えば、アスティとくしまで行われる若者向きの音楽は、大阪などの広範囲から若者を動員しており、それもひとつの音楽である。

クラシックや個人の演奏会は、やはりきちんとしたホールでやるのが相応しい。「徳島市内だから1,000席規模のホールでいいのではないか」、といわれるが、それでは発展につながらない。やはり1,800席程度のホールを造り、ホールや公演に関わる人が努力していつも満席にして、はじめて文化が向上したと言えると思う。

ホールを造れば空席にしておくわけにはいかない。会場にきて、観たり聴いたりしてほしいということを、文化活動をしている人が働きかけねばならないと思う。

3. 議題（2）その他

なし

4. 閉会